

特別企画：焼酎メーカー売上高ランキング（2017年）

霧島酒造が6年連続でトップ

～ 上位50社のうち「減収」が29社、業界の苦境が鮮明に ～

はじめに

国税庁が発表した2016年度（平成28年度）の国内酒類消費量は、約841万1800キロリットルと、前年度比0.8%減少した。減少するのは2年ぶり。ウイスキー（前年度比7.2%増）はハイボールブームにより、また、リキュール（同1.1%増）やスピリッツ（同13.7%増）は缶チューハイや缶カクテルなどのRTD（Ready to Drink）飲料市場の拡大により、それぞれ消費量や伸び率の増加が際立っているのに対し、清酒（同3.3%減）や焼酎（同3.2%減）などはやや劣勢に立たされている。

焼酎の消費量は約83万900キロリットルと、依然として根強いファンを抱えているものの、ピークだった2007年度（100万4700キロリットル）から17.3%減少するなど、過去におけるブームの収束も見て取れる。

帝国データバンク福岡支店では、売上高に占める焼酎・泡盛の割合が5割以上となった酒類製造業者を『焼酎メーカー』と定義。企業概要ファイル「COSMOS 2」（約147万社収録）より、全国の焼酎メーカーの2017年（1月期～12月期）売上高をランキング形式により抽出し、上位50社の売上高や利益動向などについて集計した。

本調査は2017年8月に続く15回目。

調査結果（要旨）

1. 2017年の売上高ランキングは、「黒霧島」で知られる霧島酒造（株）（宮崎県都城市）が6年連続でトップ。2位は、「いいちこ」ブランドを主力とする三和酒類（株）（大分県宇佐市）。3位にはオエノンホールディングス（株）の焼酎事業である「オエノングループ」が入った
2. 上位50社の売上高合計は3216億5300万円と、10年前と比較して3.8%減少した。なお、「オエノングループ」の売上高を除外して51位の売上高を加算して計算した調整後の売上高合計は、前年比1.1%減の2829億400万円と、2年ぶりに減少した
3. 上位50社のうち「減収」企業は29社と、前年（26社）から増加。売上高上位メーカーへの寡占化が進んでいる
4. 税引き後当期純利益が判明した43社のうち、「赤字」企業は9社と、前年（6社）から増加。このうち4社が2期連続で7%以上の減収を余儀なくされていた
5. 県別社数は「鹿児島県」が21社、県別売上高合計は「宮崎県」が928億1300万円で、それぞれ最多

1. 売上高ランキング

1位 霧島酒造(株) 682億5100万円（前年比4.9%増）

全国の焼酎メーカーの2017年（1月期～12月期）の売上高ランキングは、6年連続¹で霧島酒造（株）（宮崎県都城市）がトップとなった。2018年に発売から20周年を迎える主力の「黒霧島」を主体に、ロングセラー「霧島」をリニューアルした「白霧島」などが知られ、芋麴でつくる「吉助」シリーズなども展開している。2017年についても、九州地区を中心に、ブランドが定着しつつある関西・関東の大消費地において販売を伸ばした。また、収穫量が限られているため数量・期間限定の販売となる、ムラサキマサリを原料とする「赤霧島」や、タマアカネを原料とする「茜霧島」の生産量が増えたことも、売り上げが伸びる一因となった。

2位 三和酒類(株) 464億8200万円（前年比2.6%減）

6年連続で2位をキープ。“下町のナポレオン”の愛称で知られる「いいちこ」シリーズを主体に、地元大分産の麦を使用した「西の星」ブランドを展開。関東・関西・中部などの大都市圏をはじめ、北米やアジアなど世界各国・地域に販路を構築している。本格焼酎「いいちこ空山独酌」シリーズに米焼酎を追加するなど、消費者の嗜好の多様化への対応を図ったが、減収を余儀なくされた。

3位 オエノングループ 396億3100万円（前年比0.5%増）

オエノンホールディングス（株）では、傘下の合同酒精（株）（東京都中央区）、福德長酒類（株）（千葉県松戸市）、秋田県醗酵工業（株）（秋田県湯沢市）の3社で焼酎を製造しており、本調査では同3社の焼酎事業の売上高〔有価証券報告書記載のセグメント別アイテム（主要製品）別の販売実績〕を集計対象としている。2008年以降、連結売上高に占める焼酎の比率が5割を下回って集計対象外となっていたが、10年ぶりにランキングに復帰した。

しそ焼酎「鍛高譚（たんだかたん）」をはじめ、本格焼酎「博多の華」シリーズ、北海道において大きなシェアを握る甲類焼酎「ビッグマン」シリーズなど多様なラインナップを展開している。発売から35周年を迎えた「博多の華 むぎ」の販売キャンペーンなどの販促効果に加え、期中6月の酒税法改正を受けて消費者に甲乙混焼酎「すごむぎ」「すごいも」の価格・品質のバランスの良さが見直され、焼酎事業の売上高は5年ぶりに前年を上回った。

オエノングループが再びランクインしたことで、前年3位の雲海酒造（株）（宮崎市）が4位に。また、前年5位の薩摩酒造（株）（鹿児島県枕崎市）と、前年6位の濱田酒造（株）（鹿児島県いちき串木野市）の順位が入れ替わった。

¹ 2015年4月に旧・霧島酒造（株）は霧島ホールディングス（株）に商号を変更したうえで持ち株会社となり、新たに設立した霧島酒造（株）（2014年3月設立）が酒類製造部門を継承した。順位は旧・霧島酒造（株）からの通算。

2017年 焼酎メーカー売上高ランキング 上位50社

(売上高は推定を含む)

順位	前年 順位	商号	所在地	主カブランド	原料	創業	設立	決算 月	売上高 (百万円)	前年比 売上高 伸び率
1	1	霧島酒造(株)	宮崎県都城市	黒霧島、白霧島、赤霧島、吉助	芋、麦	1916年	2014年3月	3	68,251	4.9%
2	2	三和酒類(株)	大分県宇佐市	いいちこ、西の星	麦	—	1958年9月	7	46,482	▲2.6%
3	—	オエングループ	東京都中央区	鍛高譚、博多の華、ビッグマン	しそ、麦、甲類	—	—	12	39,631	0.5%
4	3	雲海酒造(株)	宮崎市	日向木挽、雲海、いいとも	芋、ソバ、麦	—	1967年11月	9	16,994	3.5%
5	4	二階堂酒造(有)	大分県日出町	大分むぎ焼酎二階堂、吉四六	麦	1866年	1964年12月	6	15,500	▲3.1%
6	6	酒田酒造(株)	鹿児島県いちき串木野市	海童、薩摩富士、隠し蔵	芋、麦	1868年	1951年7月	6	13,297	▲3.2%
7	5	薩摩酒造(株)	鹿児島県枕崎市	さつま白波、黒白波、神の河	芋、麦	—	1936年6月	6	11,800	▲9.2%
8	7	若松酒造(株)	鹿児島県いちき串木野市	薩摩一、薩州麦、わか松	芋、麦	1719年	1953年9月	6	7,481	0.9%
9	8	高橋酒造(株)	熊本県人吉市	白岳、白岳しろ	米	1900年	2001年11月	9	6,997	▲4.4%
10	9	本坊酒造(株)	鹿児島市	桜島、貴匠蔵、宝星	芋、麦、甲類	1872年	1955年10月	6	6,872	▲4.8%
11	10	美峰酒類(株)	群馬県高崎市	司、上州むぎ焼酎	甲類、麦	1941年	2007年10月	9	5,567	▲4.1%
12	11	大口酒造(株)	鹿児島県伊佐市	伊佐錦、黒伊佐錦	芋	—	1970年8月	3	5,328	▲0.3%
13	13	(株)宮崎本店	三重県四日市市	キンマ焼酎	甲類、麦	1846年	1951年3月	9	4,768	11.8%
14	15	鷹正宗(株)	福岡県久留米市	ぼっかい、ごりよんさん、南州伝楽	麦、芋	—	1935年11月	12	4,277	5.0%
15	14	小正醸造(株)	鹿児島市	さつま小鶴、小鶴くろ	芋、麦	1883年	1953年7月	6	4,078	▲1.7%
16	12	神楽酒造(株)	宮崎県高千穂町	ひむかのくろうま、天照、天孫降臨	麦、ソバ、芋	—	1954年11月	9	3,967	▲8.0%
17	16	長島醸造(有)	鹿児島県長島町	さつま島美人	芋	—	1967年2月	9	3,384	▲7.6%
18	22	岩川醸造(株)	鹿児島県曾於市	おやっさあ、ハイカラさんの焼酎	芋、麦	1870年	1922年11月	3	2,800	12.0%
19	17	札幌酒精工業(株)	札幌市	サッポロソフト、喜多里	甲類、芋	1933年	1933年10月	9	2,733	▲4.7%
20	20	田苑酒造(株)	鹿児島県薩摩川内市	田苑	麦、芋	1890年	1976年6月	6	2,625	0.0%
21	21	三岳酒造(株)	鹿児島県屋久島町	三岳	芋	—	1949年11月	9	2,600	0.8%
22	19	老松酒造(株)	大分県日田市	閻魔、麴屋伝兵衛	麦、米	1789年	1973年12月	3	2,575	▲4.5%
23	18	(株)都城酒造	宮崎県都城市	あなただひとめぼね、みやこんじょ	芋、麦	—	1956年2月	8	2,486	▲9.3%
24	—	町田酒造(株)	鹿児島県龍郷町	里の曙	サトウキビ	—	1983年10月	3	2,291	▲9.7%
25	23	(株)久米島の久米仙	沖縄県久米島町	久米島の久米仙	米	1949年	1993年7月	12	2,180	▲9.2%

2017年 焼酎メーカー売上高ランキング 上位50社 (続き)

順位	前年 順位	商号	所在地	主カブブランド	原料	創業	設立	決算 月	売上高 (百万円)	前年比 売上高 伸び率
26	28	宗政酒造(株)	佐賀県有田町	のんご、黒泉山	麦、芋	—	1985年5月	8	2,100	4.9%
26	29	新平酒造(株)	鹿児島県大崎町	大金の露、金計佐	麦、芋	1896年	1988年6月	6	2,100	10.5%
28	27	(株)奄美大島開運酒造	鹿児島県奄美市	れんと、紅さんご	サトウキビ	1954年	1998年2月	9	2,010	▲0.05%
29	26	(有)比嘉酒造	沖縄県読谷村	残波	米	1948年	1985年8月	2	2,000	▲0.8%
30	25	ヤマガキ酒造(株)	兵庫県姫路市	あらし、甲 (カブト)	麦、甲類	1666年	1962年12月	9	1,924	▲5.8%
31	30	八鹿酒造(株)	大分県九重町	銀座のすずめ、なしか	麦	1864年	1949年11月	9	1,860	▲5.4%
32	32	江井ヶ嶋酒造(株)	兵庫県明石市	白玉焼酎、福寿天泉	甲類、麦	1679年	1888年10月	9	1,846	7.4%
33	33	福井酒造(株)	愛知県豊橋市	自遊自在、千年浪漫	甲類、酒粕	1912年	1948年10月	9	1,750	4.7%
34	31	小鹿酒造(株)	鹿児島県鹿屋市	小鹿	芋、麦	—	1971年8月	7	1,728	▲3.0%
35	35	玄海酒造(株)	長崎県杵岐市	むぎ焼酎杵岐、一支國いき	麦	1900年	1985年2月	4	1,588	▲1.1%
36	34	山元酒造(株)	鹿児島県薩摩川内市	さつま五代、蔵の神、五代麦	芋、麦	1912年	1991年10月	9	1,532	▲7.0%
37	36	白金酒造(株)	鹿児島県始良市	白金乃露、石蔵	芋	1869年	1952年7月	6	1,460	▲2.7%
38	36	白玉醸造(株)	鹿児島県錦江町	魔王、白玉の露	芋	1904年	1953年2月	3	1,450	▲3.3%
39	43	聖酒造(株)	群馬県渋川市	聖	甲類、酒粕	1841年	2006年5月	9	1,345	14.8%
40	39	(資)光武酒造場	佐賀県鹿島市	魔界への誘い、舞ごち	芋、麦	1688年	1955年10月	9	1,340	▲2.8%
41	40	佐藤酒造(有)	鹿児島県霧島市	佐藤、さつま	芋、麦	1906年	1952年4月	5	1,270	▲0.8%
41	42	萬世酒造(株)	鹿児島県南さつま市	薩摩萬世、蔵多山	芋	1899年	1985年11月	6	1,270	5.8%
43	41	さつま無双(株)	鹿児島市	さつま無双、くろはち	芋、麦	—	1970年10月	6	1,180	▲4.7%
44	44	高千穂酒造(株)	宮崎県高千穂町	高千穂、わかむぎ	麦、芋	1902年	1976年2月	3	1,115	1.4%
45	45	まさひろ酒造(株)	沖縄県糸満市	まさひろ、海人	米	1883年	1965年8月	8	1,100	4.8%
46	47	ヘリオス酒造(株)	沖縄県名護市	くら、轟、琉球美人	米	—	1961年8月	12	1,050	0.0%
47	—	菊川(株)	岐阜県各務原市	菊川(株)	甲類、芋	1871年	2014年1月	10	981	20.2%
48	—	若潮酒造(株)	鹿児島県志布志市	さつま若潮、千亀女	芋、麦	—	1968年8月	7	900	0.3%
48	—	織月酒造(株)	熊本県人吉市	織月、川辺、峰の露	米	1903年	1950年9月	6	900	0.0%
50	50	(株)金龍	山形県酒田市	爽、爽金龍かおり	甲類	—	1950年4月	9	890	▲3.3%
参考 51	48	舌岐の蔵酒造(株)	長崎県杵岐市	舌岐っ娘、舌岐の島	麦	—	1984年5月	9	882	▲9.8%

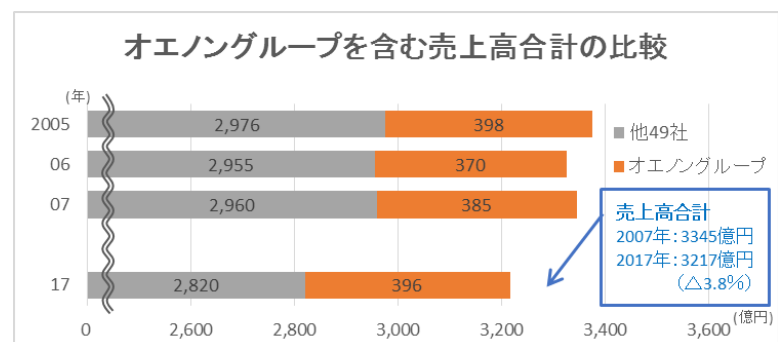
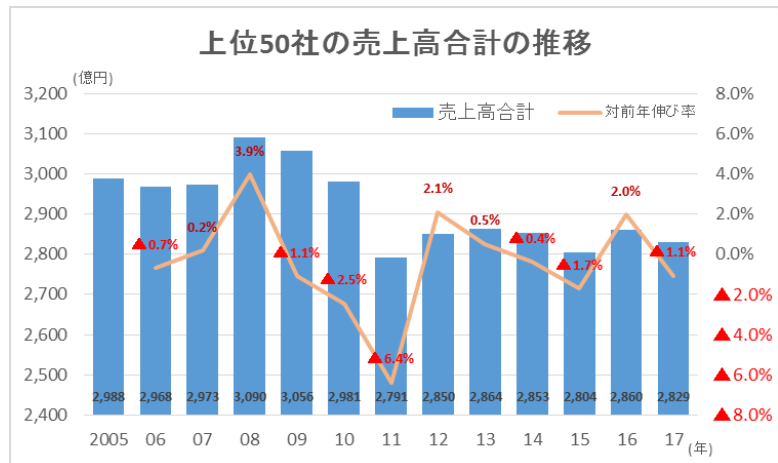
(売上高は推定を含む)

2. 売上高合計推移

2008年（2009年発表分）から2016年（2017年発表分）にかけて、今回3位に入ったオエノングループが集計対象外となっていた。このため、上位50社の売上高合計については、2009年（2010年発表分）の集計時に、2005年までさかのぼって同グループの売上高を除外し、かつ、51位企業の売上高を加算する調整を実施。以降、この調整後データを用いて売上高合計の推移をみてきたため、2017年は過去との単純比較ができない。

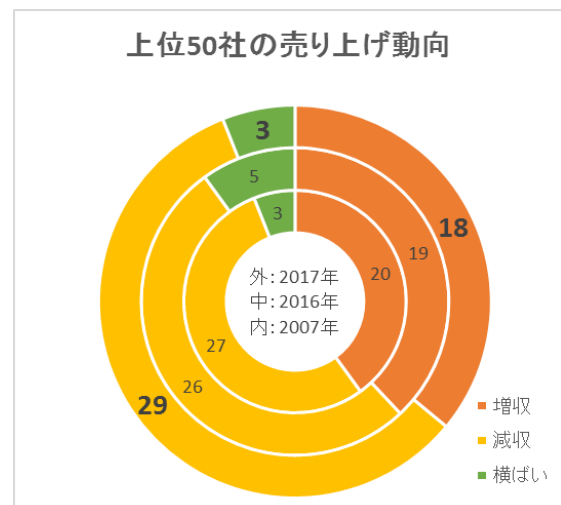
そこで、2017年についても、上記と同様の調整を行ったうえで売上高合計を比較すると、2017年の上位50社（調整後）の売上高合計は、前年比1.1%減の2829億400万円と、2年ぶりに減少した。ピーク時の2008年（3090億1300万円）から8.4%減少。売上高上位企業の躍進により2年前（2804億1600万円）こそ上回ったものの、全体としては、ワインやウイスキー、リキュール類との競合から苦戦が続いている。

なお、調整前の上位50社の売上高合計は3216億5300万円で、同グループが最後にランクインしていた2007年（10年前＝3345億円）と比較すると、3.8%の減少となった。



3. 売り上げ動向

「増収」企業が18社（前年19社）だったのに対し、「減収」が29社（同26社）にのぼった。「横ばい」は3社（同5社）。6割近くの焼酎メーカーが減収を余儀なくされており、焼酎ブームの収束と、その後のハイボールブームやRTD・低アルコール飲料の台頭などの影響を受けている様子がわかる。



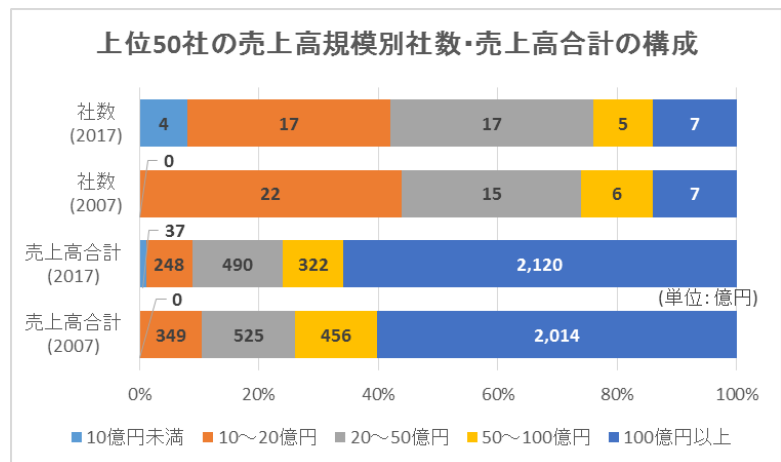
「減収」企業の増加は、売上高規模を問わない業界全体の課題だ。売上高規模別にみると、「減収」企業割合が最も高かったのは「50億円以上100億円未満」（5社中4社）で、「10億円以上20億円未満」および「20億円以上50億円未満」でも半数以上が減収となっている。「100億円以上」も7社中4社が「減収」となった。

また、2007年（10年前）と比べると、大手メーカーへの売り上げ集中が進んでいる実態も見えてきた。「100億円以上」は社数こそ7社で変わらないものの、同区分の売上高合計は2013億8600万円から2119億5500万円（5.2%増）となり、上位50社の売上高合計に占める割合は60.2%から65.9%に上昇した。2007年は上位50社に「10億円未満」がなかったが、2017年は4社を数えた。

■ 上位50社の売上高規模別の売上動向

売上高規模	増収	減収	横ばい
10億円未満	2	1	1
10～20億円	6	10	1
20～50億円	6	10	1
50～100億円	1	4	0
100億円以上	3	4	0

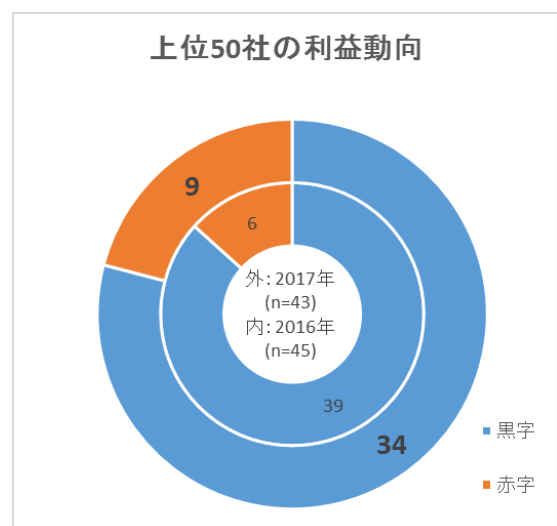
上位50社の売上高規模別社数・売上高合計の構成



4. 利益の動向

税引き後当期純利益が判明した43社（前年45社）のうち、「赤字」企業は9社（同6社）だった。構成比は20.9%（同13.3%）と、収益面でも苦戦を強いられる企業が増加している。「赤字」となった9社のうち、2年連続減収となった企業が6社で、そのうち4社は2年連続で7%以上の減収を余儀なくされた。太陽光発電設備の設置にともなう減価償却負担の増加など、一時的な要因含みの企業もあるが、減収が利益減少に作用している傾向が見て取れる。

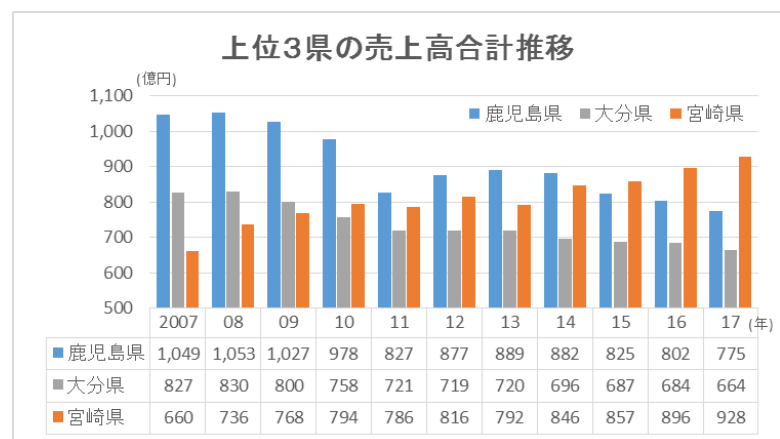
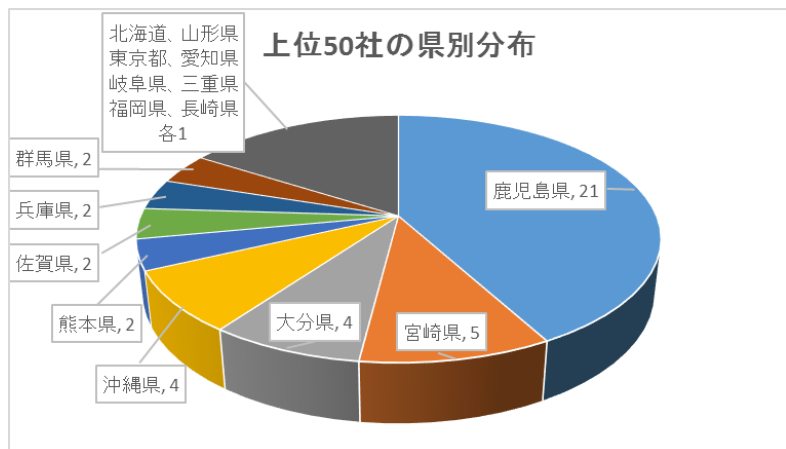
上位50社の利益動向



5. 県別の分布

本社所在地は、「鹿児島県」が21社（前年21社）で最多。「宮崎県」が5社（同5社）、「沖縄県」（前年5社）と「大分県」（前年4社）がそれぞれ4社で続く。

県別の売上高は、ランキングトップの霧島酒造（株）がけん引した「宮崎県」が前年比3.5%増の928億1300万円で最多。「鹿児島県」は同3.5%減の774億5600万円と、やや水を空けられた。麦焼酎を主力とする「大分県」は同2.9%減の664億1700万円だった。



まとめ

2017年の売上高トップは霧島酒造（株）となった。首位は6年連続。売上高は2007年（10年前、299億4000万円）と比べて2.28倍にもなり、伸び率は2017年ランキング上位10社のなかで増収となった若松酒造（株）（8位、55.7%増）、濱田酒造（株）（6位、41.1%増）と比べても群を抜いており、まさに“独り勝ち”の状況と言える。

他方、酒類業界全体としては、人口減少や少子高齢化という構造的な問題に直面するうえ、ライフスタイルの変化、若年層を中心とする嗜好の変化による飲酒機会の減少などからやや苦戦を強いられている。焼酎メーカーの上位50社の売上高合計は10年前と比べて3.8%減少、前年と比べても1.1%減少（調整後）した。近年は、スパークリングワインや、ウイスキーを炭酸水（ソーダ）で割ったハイボールなどの需要が増加し、また、大手総合酒類メーカーなどは“家飲み”に適した缶チューハイや缶カクテルなどのRTD・低アルコール飲料を続々と投入している。メーカー上位50社のうち、「減収」企業が29社（前年26社）、「赤字」企業が9社（同6社）と、それぞれ前年から増加したのは、そうした影響を受けた結果と言える。

こうしたなか、焼酎業界では“家飲み”需要に対応する紙パック商品が改めて注目された側面もあるが、2017年6月に施行された酒税法改正では、オエノグループのように追い風になった例もあれば、逆風となった例もある。量販店やディスカウント店に対して過度な安売り規制がかかったことから、一部の本格焼酎などは販売価格が引き上げられており、霧島酒造（株）が発表した2018年3月期売上高が20年ぶりの減収になったのも、そうした規制のあおりを受けた可能性がある。業界首位で圧倒的なブランドを有する企業でさえも、市場の急激な変化への対応に苦慮しているのが実情だ。さらに、今夏の記録的な猛暑が酒類販売を落ち込ませる一因となることが予想され、特に焼酎業界はその影響を受ける公算が大きい。

今年5月には清涼飲料メーカー大手のコカ・コーラシステムが、「檸檬堂」ブランドでレモンサワーの販売を九州限定で開始するなど、今後も酒類の垣根を越えた競争が続く見通しだ。ただ、ランキング4位の雲海酒造（株）が投入した「木挽BLUE」は、市場のニーズにマッチした商品として売り上げが伸びている。劣勢をはね返すためには、各社もそうした市場ニーズを捉えた商品の企画を継続していくことが欠かせず、また、販売面についても、オンライン通販に対応しながら、自ら積極的にブランドプロモーションを重ねていくことが重要となろう。

【内容に関する問い合わせ先】

株式会社帝国データバンク福岡支店情報部 担当：三好暁久／晨智海

TEL：092-738-7779 FAX：092-738-8687

当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。

当レポートはプレスリリース用資料として作成しております。報道目的以外の利用につきましては、著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および無断引用を固く禁じます。